

未来につなぐ戦争の記憶

— 茨城県日立市を例として —

村上 信夫 阿部 桜 阿部 真子 大川 美波
金野 亜紀 松室 花実 中島まどか 渡辺 瑞樹

概要

終戦から70年以上が経過し、2050年には、全人口の中で占める戦争体験者（終戦時5歳以上）の割合は0.01%になると予測されている。体験者の減少と共に戦争の記憶の風化が叫ばれている。しかし、ここである疑問が浮かぶ。戦争の風化は「時間の経過」、「戦争体験者の減少」だけが原因なのだろうか。戦争の伝え方、受け手である若者に何か問題はないのか。時間の経過と体験者の減少を全ての原因にしてしまつては、記憶の風化は避けられないものとなる。他の原因も追究することで、風化に対する新たな対策も考えられる。本研究は、2度の空襲、1度の艦砲射撃で市の中心部を焼き払われた茨城県日立市を例に、平和教育の現状と新たな施策の提案を行うものである。

問題意識

終戦から70年以上が経過し、それと共に戦争を体験した人はどんどん減少している。総務省の「人口推計年報」と国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口（中位推計）を基に作成したデータによると、2050年には、全人口の中で占める戦争体験者（終戦時5歳以上）の割合は0.01%になると予測されている。

体験者の減少と軌を一にして戦争の記憶の風化が叫ばれている。70年という時間の経過と共に、かつて我が国が戦争を起こし、日本中が焼き払われるという結果を招いたことを忘れつつある。

しかし、ここである疑問が浮かぶ。戦争の風化は「時間の経過」「戦争体験者の減少」だけが原因なのだろうか。戦争体験の伝え方、受け手である若者、この受発信に問題があり、記憶の風化につながっているのではないか、それが本研究の問題意識である。

研究のフィールドとして、茨城県北部にある日立市を選んだ。日立市は茨城県内で一番大きな戦争被害を受けた土地である。また、全国で4都市しか受けていない、戦艦などからの直接砲撃、艦砲射撃の被害も受けている。日立沖僅か数キロ（異説あり）に現れたアメリカ・

イギリス海軍16隻から1000発以上の砲弾が撃ち込まれた。

他にも、2度に渡る空襲では計156機のB29爆撃機から1トン爆弾、焼夷弾が投下されている。太平洋戦争当時、日立製作所では銃や船のエンジンを作っていたため、攻撃の対象になったと言われている。しかし、その大部分は住宅街に落下し、日立の街は完全に焼き払われ、1562人も命が奪われた。

東京大空襲、沖縄地上戦、広島、長崎への原爆投下ほど有名ではないが、日立市も全国有数の戦争被害を受け、市民が巻き込まれた戦場だったのである。この日立市で、戦争体験がどのように継承しようとしているか平和教育の調査分析を行った。

平和教育を分析するに当たっては、広島大学池野範夫教授の説などを参考に、戦争に関する情報・事実を学ぶ「知識型」と戦争体験を迫体験する「共感型」の2つに分類した。

本稿の構成は、第1章 日立市の戦争被害（概要）、第2章では日立市で行われている平和教育とその現状を紹介する。第3章 平和教育と記憶 平和教育の有効性に関し、アンケートから分析する。さらに第4章で、戦争体験者聞き取り・語り部教育の実態調査を行い、前述、戦争体験の送り手・受け手の問題を明らかにする。その上で、第5章では新たな戦争体験記憶の新メソッド「戦争体験手記のリライティング」を提唱、第6章でまとめとする。

第1章 日立市の戦争被害

日立市は茨城県北部に位置し、県庁所在地の水戸市からは車で約30分の場所にある。現在の人口は約20万人、面積は約225km²である。

日立市は日立鉱山、日立製作所の街として明治時代半ばから発展を遂げてきた。太平洋戦争時、日立市は軍事産業を担っており、日立製作所では銃や船のエンジンなどを作っていた。そのため日立市が空襲や艦砲射撃といった攻撃の対象になった。1944年の人口は約85,000人であったが、1945年には、人口が約39,000人にまで落ち込んだ。

戦後、日立製作所があることから1945年10月9日に戦災都市に指定され、国から特別都市計画法が公布された。復興は急ピッチで進められ、終戦1年後には戦災で焼失した日立製作所の新工場が建てられたほどであった。同市の戦争体験語り部の一人、皆川直司氏（終戦時10歳）によると1948年には道もきれいに整備されていたという。

日立市の戦争被害

諸説あるものの、太平洋戦争時では全国200以上の都市が空襲の被害を受け、30万人以上の人々が亡くなった。日立市もそうした都市の一つである。

1945（昭和20）年6月10日、日立市は一回目の空襲（図1）を受けた。B29爆撃機29機が襲来、1トン爆弾など806発を投下した。爆弾は日立製作所の海岸工場に落下し、従業員だけ

でも634人が死亡した。1トン爆弾が投下された痕は、工場内に今も残されている。

7月17日の夜から18日にかけては艦砲射撃による攻撃（図2）を受けた。日立市沖合のアメリカ・イギリス海軍16隻から1000発以上の砲弾が撃ち込まれ、多くの被害が出た。この攻撃は日立製作所の各工場や日立兵器会社を狙ったものであったが、悪天候のために目標をそれ、住宅街にも被害が及んだ。

7月19日には二回目の空襲（図3）が行われた。960トンの焼夷弾が投下され、死傷者を出しただけでなく市内の公共施設の大部分が焼失した。

空襲の被害に加えて、海上からの艦砲射撃も受けた。艦砲射撃は、釜石（7月14日、8月9日）、室蘭（7月15日）、日立と勝田（7月17日）、浜松（7月29日）と、全国で4都市のみが攻

◆図1 第一回空襲

日付・時間	1945年6月10日9時頃
攻撃内容	B29重爆撃機 29機襲来 806発爆弾投下
人的被害	日立製作所海岸工場の従業員 634人死亡 隣接する地域で641人死亡
物的被害	日立製作所海岸工場の上屋面積99.6%、19万9100平方メートルを破壊。隣接する地域で約1500戸が全壊、900戸が半壊

◆図2 艦砲射撃

日付・時間	1945年7月17日23時14分～18日0時11分
攻撃内容	○アメリカ海軍第三艦隊 第34.8.2任務隊所属 ・戦艦5隻（ウィスコンシン、ミズーリ、アイオワ、ノースカロライナ、アラバマ）・軽巡洋艦2隻・駆逐艦9隻 ○イギリス海軍艦艇3隻（キング・ジョージ5世ほか駆逐艦2隻）
	○多賀地区 ・日立製作所多賀工場 530発 ・同電線工場 126発 ・同山手工場 89発 ・日立鉱山電錬工場 125発 ○勝田地区（現ひたちなか市） ・日立兵器株式会社 224発 ・日立製作所水戸工場 144発 着弾数内訳（工場：75発 工場外：293発）
人的被害	○多賀地区 ・死者 317人・重軽傷者 367人・行方不明者 9人 ○勝田地区（現ひたちなか市）・死者 77人
物的被害	○多賀地区 ・工場外の住宅街に落下全壊 637戸 半壊 1059戸 ○勝田地区（現ひたちなか市） ・日立兵器株式会社 壊滅 ・家屋 全焼・全壊 34戸 半壊 69戸 一部損壊 199戸

◆図3 第二回空襲

日付・時間	1945年7月19日23時20分～20日0時53分
攻撃内容	アメリカ空軍第73飛行団所属B29重爆撃機 127機襲来 1時間18分で13900発の焼夷弾投下
人的被害	死者 143人
物的被害	日立市内の公共施設など大部分が焼失。全焼家屋・建物 11249戸

撃されている。

第2章 村上ゼミ生による聞き取り調査 市民の戦争（日立市を中心として）

本研究に当たり、日立市の戦災の語り部4人（うち1名は戦後生まれ）と、予科練（旧海軍予科練習生 14歳～17歳の少年たち）の語り部5人の「戦争体験」の聞き取り調査を行った。村上ゼミ生が1～2人で戦争体験者1人の話を聞く形式である。

小人数だったこともあり、分からない用語などの説明を含め毎回数時間かかった。初めて聞く戦争の体験に、聞き取り中に涙が止まらなかった女子学生もいた。

さらに本研究に対し提供いただいた戦争体験者の手記や手紙からも、「戦争体験」について分析を行った。

（i）西宮幸夫氏（84歳）日立市の戦災体験

西宮氏は6月10日・1トン爆弾、7月17日・艦砲射撃、7月19日・焼夷弾攻撃の3度の攻撃を経験した。6月10日の攻撃では、日立製作所に勤めていた父親を亡くしている。その日は休みだったが、空襲警報が鳴る中、会社の様子を見に行き、会社の防空壕の中で窒息死した。西宮氏自身も7月17日の艦砲射撃の衝撃で、左耳が聞こえなくなった。（現在も聞こえない）

一番恐怖感を感じたのは、艦砲射撃ですよね。身体のあちこちに当って。今も傷が残っている。押し入れの棚が落ちて、壁が崩れて、息は苦しいし臭いし。あれはまだ忘れられない。出ようとしたら大きな石でふさがれていた。土手に有った石が飛んできた。それにふさがれて出られなくなってしまった。

西宮幸夫氏（当時11歳）

（ii）皆川直司氏（82歳）日立市の戦災体験

皆川氏は、1トン爆弾、艦砲射撃、焼夷弾と3度の攻撃を体験している。戦後、茨城県の小中学校の社会科教員として働いていたこともあり人前で話すと言うことに慣れているため、戦争体験をずっと語り続けてきた。今も日立市内の小学校・中学校でも毎年語り部活動を行っているが、学校数は年々減少しているという。

70年たった今でも、恐怖の体験は鮮明に頭に残っている。焼夷弾攻撃の火の海の中を、子どもだけで逃げ回った。

皆川直司氏（当時10歳）

（iii）山下久雄氏（現86歳）日立市の戦災体験

山下氏は、1944（昭和19年）年9月、12歳の時に東京から父親の実家のある日立市諏訪町

に疎開した。父親は「日立なら安全だろう」と長男の山下さんだけを先に疎開させた。疎開先ではカボチャやサツマイモなどを作っていたが、「タンポポなど食べられるものは何でも食べた」という。家族全員が身を寄せた45年、7月17日に艦砲射撃を体験した。

爆弾の音はヒュードン、ヒュードン、ヒュードン、ヒュードンと聞こえた。防空壕の中で小さく体を丸め、学校で何度も練習した通りに手を顔面に持っていき、親指で両耳を押さえ、他の指で両目を押さえた。衝撃音で耳の鼓膜が破れないように耳を守り、衝撃で眼球が飛び出さないように閉じた目を押さえ、呼吸ができるように口を開け、身体を低くするのだと教えられていた。

山下久雄氏（当時13歳）

(iv) 渡部八郎氏（68歳）戦後生まれだが、日立市の戦災を語り続けている。

戦後の生まれだが、戦時中に空襲で姉を亡くしていることから、戦争に対し強い憤りを感じている。24歳の時に、日立製作所（日立市）に勤務した事をきっかけに、日立の戦争について調査をするようになった。現在、戦争体験者と協力し、「ひたち生き生き百年塾」という歴史を継承する団体で、日立市の戦争に関し語り継ぐ活動を行っている。

(v) 戸張礼記氏（89歳）予科練出身 特攻に散った仲間の想いを語り続ける。

予科練とは「海軍飛行予科練習生」の略称。旧日本海軍で、飛行機搭乗員を速成するため、1930（昭和5）年に設けられた制度。14～15歳の少年に約3か年の基礎教育を施した。終戦までの15年間で約24万人が入隊し、約1万9千人が戦死したとされる。特攻隊として出撃した者も多かった。39年に教育拠点を神奈川県横須賀市から茨城県阿見町に移した。戦況の悪化後は大量採用に伴い全国19カ所に教育場所が設けられた。

戸張氏は1944（昭和19）年、16歳で土浦海軍航空隊に入隊した。

伝令の最中に空襲にあった。飛行機が近づいてきたと思ったら、頭上すれすれに降りてきて銃撃をしてきた。敵機が打ち落とされて「やった」と思ったら打ち落とされたのは友軍機であり、先輩搭乗員だった。緊急脱出用のパラシュートをひらいていたが、首がガクツとなっていたからすぐ戦死したのだとわかった。

特攻で先に飛び立った先輩達は、遺書に「先に行くから後は頼む」と残り飛び立っていったが、後は頼むというのは戦争を止め、家族の安全を守ってくれという意味だった。

戸張礼記（当時16歳）

(vi) その他（資料提供）

◇加納芳徳氏（故人）日立市の戦災体験

加納氏は、昨年、他界。その際、自身の戦争体験をまとめた手記を前述の皆川氏に託した。

今回、それを提供していただいた。

1945年6月、小学校3年生のときに日立の1トン爆弾空襲を経験した。艦砲射撃の後、この地には危険だという父の考えで、家族7人で日立市から高萩市に疎開した。疎開し、留守にしていた自宅には7月に焼夷弾が2発落とされ、疎開していなければ死んでいたかもしれないと話した。加納芳徳著『太平洋戦争終結より50年』

◇富永昇一氏（多賀工業専門学校OB）日立市の戦災体験

村上ゼミの研究活動が朝日新聞（2017年8月18日付県内版）で紹介され、それを読んだ茨城大学学長の三村信男先生から託された手記である。富永昇一氏は官立多賀工業専門学校機械科（現茨城大学工学部）在学中に、1トン爆弾、艦砲射撃、焼夷弾と3度の攻撃を経験した。1トン爆弾の攻撃時には、日立の工場で勤労奉仕として、松根油をとる勤労奉仕に従事していた。

標高二〇〇メートル（※原文ママ）位の山の上で作業をしていると、午前9時頃だったろうか、轟音と共にB-29の大編隊が上空に現れたと思う間もなく、真下の日立工場めがけて爆弾を投下し始めた。B-29の編隊は、悠々とあたかも大空に止まってでもいるように、そこから爆弾が雨のように投下されていくのが目の前に見えた。（略）

私の眼にしたものは、何処を通ったらいいか足の踏み場がない程道路に横たわっていた、沢山の犠牲者の遺体だった。なんともやりきれない気持ちになりとうとうその場に座りこんでしまったが、直ぐに気を取り直して合掌し、済みませんと叫びながら、夢中で遺体を飛び越えて走り抜け、やっとの思いで我が家に辿り着いたことを覚えている。

富永昇一手記（当時、官立多賀工業専門学校1年生）

また、三村先生からは、昭和20年の艦砲射撃で茨城大学工学部の前身の多賀工業専門学校、早川富正校長の家が直撃弾を受けて、校長を含む一家が犠牲になったこと。また、学生寮、吼洋寮の近くに着弾し死者が出た。その慰霊碑が寮の側にあり、毎年慰霊祭が行われているという情報も頂いた。戦争は最も身近な場所でも起こっていたのだ。

第2章 日立市の平和教育

日立市における平和教育は、市が行うものと学校単位で行うものに大別される。市の平和教育の調査は市民活動課及び教育委員会への聞き取り調査。学校単位の教育に関しては、市内全ての小学校・中学校・高等学校（公立・私立共）49校にアンケート調査を行った。

2-1 市主催の平和教育

日立市は、1985（昭和60）年、「核兵器廃絶・平和都市宣言」を行った。それに基づき市が受けた戦災や広島・長崎の原爆被害等の紹介、平和啓発広告塔等の設置を行い、命の大切さや尊さを市民に訴える平和事業を行っている。平和教育はその一環である。

(i) 日立市平和展

日立市の戦災状況や戦時中の生活の様子の写真、さらには原爆に関する写真ポスター等の展示を行っている。1986年から毎年8月に開催されている。

平和展では、戦中・戦後の写真や当時使われていた品々が展示されており、艦砲射撃や焼夷弾により近隣の工場が破壊された状況写真も展示されている。日立製作所を創業した小平浪平による弔詞が展示されていた。以下、調査に当たった村上ゼミ生の感想である。

日立市の戦災より、広島・長崎の被害の方が目立って感じた。(村上ゼミ3年 女子)
来場者は1~2人ほど。そして高齢者が目立った。(村上ゼミ3年 女子)

(ii) 小平記念館と日立製作所の工場見学

市内の小学6年生は郷土学習のための校外学習として小平記念館と1トン爆弾の痕を見学している。小平記念館は、創業者・小平浪平の功績を記念したもので、日立製作所海岸工場の敷地内に建っている。日立製作所の歴史についての展示と共に日立製作所が受けた戦争の被害に関する資料が展示されている。

日立製作所の敷地内に残されている1トン爆弾の痕を見学するカリキュラムもあり、社員が空襲についての説明を行っている。また、日立市郷土博物館でも学芸員の解説を交えながら、戦争について学習する。

この校外学習は、日立市教育委員会が送迎用のバスを用意しているもので、「鉱工業を中心に発展してきた歩みや戦災とその復興を中心とする郷土、日立市の歴史に対する理解を深め、郷土を思う気持ちを育てる」ことを目的としている。

1トン爆弾が投下された痕は記念館の裏に大きな窪みとなって残されている。その中心には爆弾そのものが、火薬を取り除き、サビ止めのための白い塗料が塗られた状態で保存されている。一部が壊れ変形していることが、今も生々しい。以下は、小学校の郷土学習で見学した茨城大学人文学部3年生（2017年当時）、皆川智子さんの記憶である。

小平記念館で特に覚えているのは1トン爆弾の跡地の見学です。日立市で戦争の被害があったことをそこで初めて知ったような記憶があります。中央に置かれた白いものが爆弾の一部とは当時の私は分かりませんでした。戦争でたくさんの人が亡くなったの

だということをリアルに意識することができたいい機会だったと思います。

(iii) 日立生き生き百年塾 日立のまち案内人による戦争の跡地を巡るツアー

自分自身や兄弟などの戦災体験談を解説しながら戦争の爪痕が残る遺跡を案内するツアーを実施している。大空襲があった6月10日に行われている。

(iv) 「平和への旅」青少年派遣事業

1995年から3年ごとに、市内の中学生（各学校1人ずつ、全15人）を被爆地である広島市・長崎市に交互に派遣し、原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列や原爆資料館見学等を通じて、戦争の悲惨さと平和の大切さ、命の尊さについて学ぶ機会を提供している。

(v) 終戦70周年記念事業（2015年）

市内の戦災体験者による講話、戦争体験記録文集「十四歳の戦争」執筆者と日立第二高校放送部との対談と朗読を実施した。また戦災体験者6名へのインタビュー映像と市民25名から寄せられた体験談をもとに、記録映像「未来へと語り継ぐ日立の戦災」を制作した。

2-2 小・中・高等学校で行われる平和教育

日立市の学校でどのような平和教育が行われているのか、市内の全ての小学校・中学校・高等学校（公立・私立共）49校に以下のアンケート調査を行った。

■アンケート項目

- ・今年度行った平和教育、これから行う予定の平和教育はありますか。
- ・語り部からお話を聞く機会がある場合は、対象となる学年は何年生ですか。
- ・これまで行っていたが、現在は止めたという平和教育はありますか。
- ・授業内でどれくらいの時間をかけて戦争について学習していますか。（年間）
- ・地元である日立市の戦災について学習していますか。
- ・地元の戦争を伝えることに対して、どのようにとらえていますか。

■アンケート（概要）

時期：12月1日～12月18日

対象：日立市内の小学校・中学校・高等学校（公立・私立共）49校

方法：事前に電話でアンケートの依頼を行い、その後、下記アンケートを送付（メール）。更に電話で追加インタビューを行った。

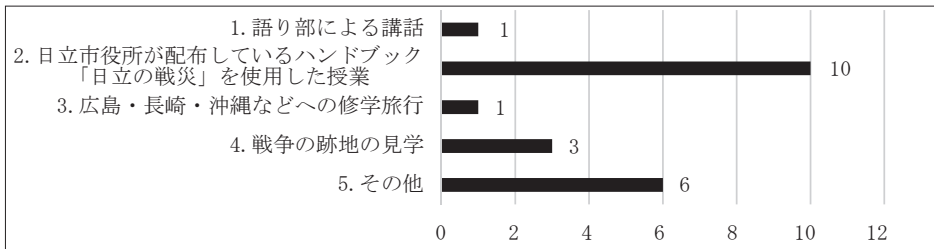
有効回答数：小学校11／25 中学校7／15 高等学校8／9

(i) アンケート結果（概要）※複数回答可

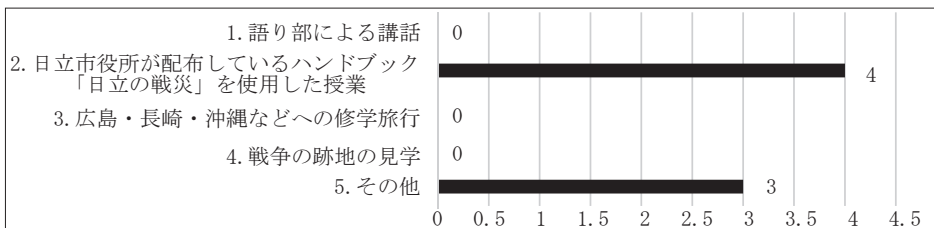
小学校（図4）で一番多かった回答は、市が配布するハンドブックを使用した授業であった。25校のうち10校が行っていた。次が戦争跡地の見学である。これは社会科見学に含まれる。その他、2017年度語り部による講話を行った学校は1校のみであった。中学校（図5）でも小学校と同様一番多かったのはハンドブックを使用した授業で、全15校中4校が行っていた。

高校（図6）で一番多かったのは、修学旅行（沖縄）での平和学習である。市内全8校のうち7校が行っている。これは沖縄戦や原爆投下について取り上げるものであり、地元の戦争被害について取り上げている高校は少なかった。語り部による講話は1校が行っていた。

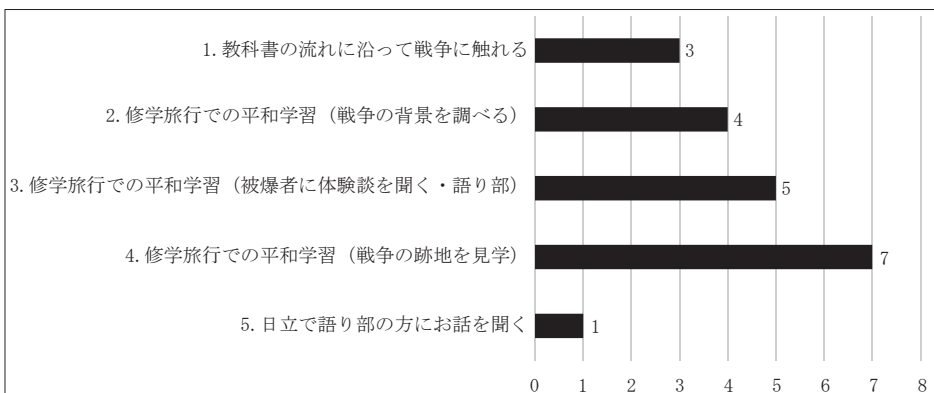
◆図4 今年行った平和教育（小学校）



◆図5 今年行った平和教育（中学校）



◆図6 今年行った平和教育（高校）



(ii) 「日立の戦災」ハンドブック・戦後70周年記念DVD 利用状況

終戦70周年記念事業として、2015（平成27）年、日立市が受けた大規模な戦災の様子や戦争体験、教訓を若い世代へ語り継ぐ学習資料として、平和啓発ハンドブック「日立の戦災小中学生 平和学習資料」を作成。市内の全小中学校にクラスに一部ずつ配布している。また語り部の戦争体験を収録したDVD「日立の戦災」「語り継ぐ平和への想い」を制作、各校に一枚、配布している。この2つが小中学の平和教育の中心となっているため、利用状況のヒアリングを依頼したところ、匿名を条件に担当教員が答えてくれた。

小学校のケース（匿名）

教務主任の先生（匿名）によると、その小学校では「ハンドブックの利用、DVDの利用共にしていない」。ハンドブックは「クラスに1冊しかなく授業での利用が困難」という理由だった。また「教室にテレビの設置がなくDVDを見せることも出来ない」状況にあった。

なおハンドブックを利用しているという別の小学校の例があり、問い合わせしたところ、「児童数が少ないためにハンドブックの利用ができる」という返事だった。

中学校のケース（匿名）

同校で社会の授業を担当する教員（匿名）は、「ハンドブックに関しては授業で利用していない」。理由は、「1人1冊配布されている訳でないため、授業で利用することは難しい」「せめて2人に1冊程度ないと全員で共有することはできない」からである。

しかし、同校では日立市の戦争に関して力を入れて教育を行うことを指針としている。

同校で頻繁に活用されているのは、戦後70周年記念DVDである。「DVD中にある資料であれば、テレビに映してクラスの生徒全員に見せることができるため有効」だという。

2015年まで、夏休みに語り部を学校に招き戦争体験を話してもらう講話の時間を設けていたが、現在、中止している。理由は語り部の高齢化である。戦争体験者の声を直接聞く機会がなくなったため、その補完に語り部の話が収録されているDVDを利用している。

アンケートとヒアリングにより、日立市の戦災ハンドブックが児童数、生徒数に見合っていないため、活用されていない状況が明らかになった。また語り部による講話を止め、それに換えてDVDを利用しているという学校もあったが、「声という点で言えば生の声ほどの印象は与える事ができない」という感想があった。

2-3 平和教育の時間とその分類

アンケート調査を基に広島大学の池野範夫教授（2008）の説を参考にして、日立市が行っている平和教育を2つのタイプに分類する。戦争に関する事実を学ぶ「知識型」と戦争体験を追体験する「共感型」である。

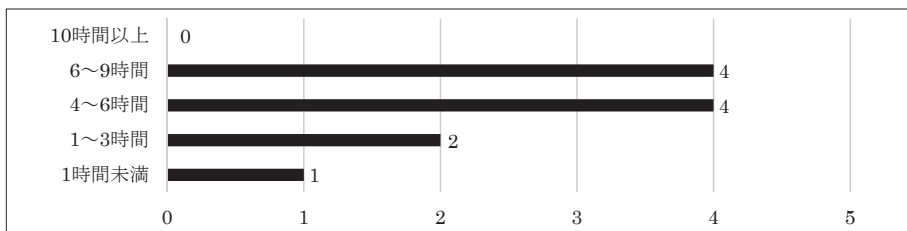
平和教育は、「歴史」などの時間で教科書に沿って小学校（図7）では6年間で4～9時間、中学校（図8）では3年間で7時間以上、高校（図9）では3年間1～4時間、小学校から高校の12年間で平均計16時間、戦争について学んでいる。内容は日中戦争から太平洋戦争について学び、戦争による被害としては沖縄戦、原爆投下や東京大空襲等である。

「地元の戦争」に関しては郷土学習の一環として、空襲、艦砲射撃について学んでいる。小学校では回答があった11校全部が実施していると回答、中学校では7校中4校が実施していた。郷土学習は小中高合わせ9年間で5時間になる。これらは教科書やハンドブックを使った「知識型」教育に分類される。

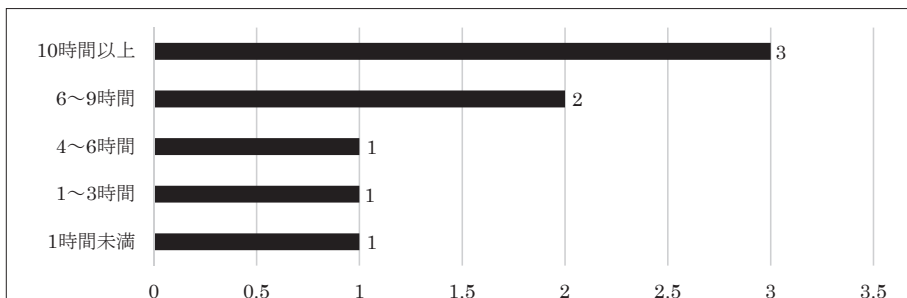
「共感型」教育の代表的例は、見学、そして、語り部による講話が挙げられる。見学は、前述「小平記念館と1トン爆弾の痕の見学」は、全小学校6年生を対象に実施されている。

それに対し体験者による講話は、小中高合わせ2校に過ぎなかった。児童・生徒の受ける平和教育は、「知識型」に偏っているといえる。

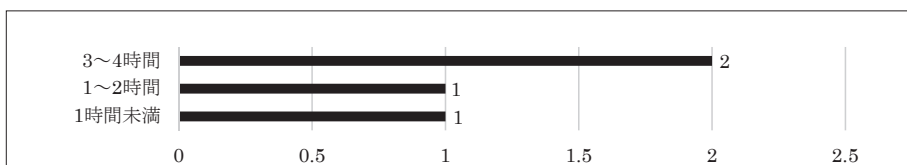
◆図7 平和教育の時間（小学校）



◆図8 平和教育の時間（中学校）



◆図9 平和教育の時間（高校）



次章では、「知識型」「共感型」分類に基づき、平和教育の効果について検証する。それにより問題意識で提示した戦争の記憶の風化を促す送り手、受け手の問題を明らかにする。

第3章 平和教育の有効性

3-1 「日立市の戦災」その記憶の風化

大きな被害を受けた日立市。それを次世代に伝えようという努力は、前述のように行われている。その効果は、戦争被害に関し20代ほどの程度知っているのか、日立市で小中高校と教育を受けた男女56人にインターネットアンケート（図10）を行った。

学年が上がるにつれて比率は下がるものの、平和教育を受けた記憶はあった。攻撃を受けたことは約8割が知っていると答えている。しかし、艦砲射撃や焼夷弾攻撃等、詳細については5割前後の人が知らないといい、さらに日時は殆どが知らないと回答している。

学校で行う平和教育では、日付や攻撃の内容、規模なども教えている。が、このアンケート結果から詳細までは記憶に残っていないことがわかる。

時期：8月8日～10月25日

対象：日立市の小学校・中学校・高校で教育を受けた男女20代

方法：インターネットでの回答 回答：56人

「知識型」教育の限界（日立市出身20代男女アンケートから）

日立市では様々な平和教育が実施されている。市の担当者が「平和教育に関して、日立市

◆図10 アンケート項目と結果

1	小学生の時に戦争について学習しましたか。	はい	91.1%	いいえ	8.9%
2	中学生の時に戦争について学習しましたか。	はい	78.6%	いいえ	21.4%
3	高校生の時に戦争について学習しましたか。	はい	59.0%	いいえ	41.0%
4	日立市が1トン爆弾で空襲されたことを知っていますか。	はい	76.8%	いいえ	23.2%
5	日立市が艦砲射撃にあったことは知っていましたか。	はい	55.4%	いいえ	44.6%
6	日立市に焼夷弾空襲があったことは知っていましたか。	はい	55.4%	いいえ	44.6%
7	1945年6月10日が何の日か知っていましたか。(1トン爆弾空襲の日)	はい	7.1%	いいえ	92.9%
8	1945年7月17日が何の日か知っていましたか。(艦砲射撃の日)	はい	9.0%	いいえ	100.0%
9	1945年7月19日が何の日か知っていましたか。(焼夷弾空襲の日)	はい	9.0%	いいえ	100.0%
10	1945年8月6日が何の日か知っていましたか。(広島原爆の日)	はい	94.6%	いいえ	5.4%
11	1945年8月9日が何の日か知っていましたか。(長崎原爆の日)	はい	94.6%	いいえ	5.4%
12	1945年8月15日が何の日か知っていましたか。(終戦記念日)	はい	98.2%	いいえ	1.8%

では様々な方法を他より積極的に行っている」と話すほどである。が、アンケートで明らかになったように、日立市出身の20代は攻撃を受けた事実こそ殆どの人が認知しているものの、艦砲射撃や焼夷弾空襲等、攻撃を受けた方法になると認知度が5割以下、日付に至っては殆どの人が分からないと回答している。学校で行う平和教育では、日付や攻撃の内容、規模も教えているが、詳細までは記憶に残っていないことがわかる。

一方、1トン爆弾空襲（76.8%）と艦砲射撃、焼夷弾空襲（55.4%）では大きな差が見られた。1トン爆弾空襲は小平記念館・HITACHI見学があり、現地で話を聞く機会があるが、他は同様のことがないからと考えられる。

ハンドブックやDVDで日時や被害の規模を学ぶことはできる。しかし、事実とデータを教える「知識型」教育では長く記憶に残らないということが考察される。しかし、前章で分かったように児童・生徒に対する平和教育は、「知識型」に偏っていることが指摘できる。

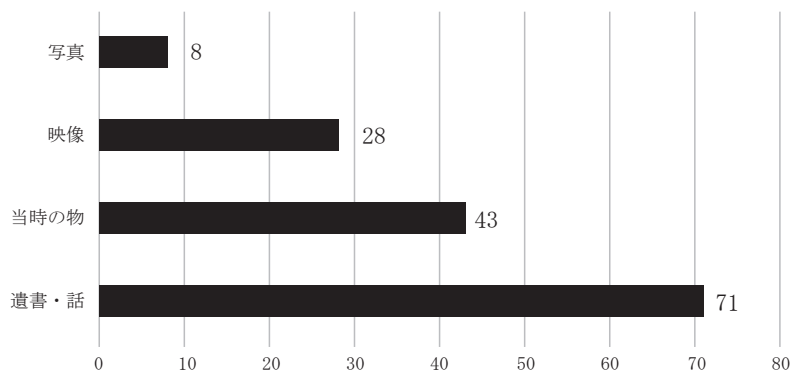
3-2 「共感型」教育の有効性について（笠間高校へのアンケートから）

共感型の平和教育として代表的なものは、戦争体験者による講話、いわゆる「語り部活動」である。語り部活動は、体験者が学校などに赴き生徒たちにその戦争体験を直接語るという手法である。その他、戦争体験者の語りを収録したDVDやハンドブックの体験者の手記を利用する学習法もある。「体験」そのものを学ぶ方法が共感型の平和教育である。

笠間高校2年生のアンケート（図11）

共感型の平和教育の有効性に関し調査を行った。対象は平和教育に熱心な茨城県立笠間高校（笠間市）2年生。日立市の学校ではスケジュールなどが合わず、同校に協力して頂いた。笠間市はかつて海軍航空隊の基地があり、特攻隊発祥の地。日立市とは別の意味で、戦争の跡が残っている。調査は、笠間高校の2年生に、平和教育の半年後、どのような戦争に関する知識が心に残っているかアンケートを行った。期間は2017年12月13日から12月15日まで、

◆図11 印象に残った継承方法



回答は139人（男子69人・女子70人）。

アンケートの結果、およそ半数が共感型の内容に関して記憶に残ったと話している。さらに1年間に受けた様々な平和教育の中で最も多くの生徒の心に残っているのは、戦争体験者の講話や遺書といった体験談と答えた。

このことは、Tulving(1983 太田訳 1985) のエピソード記憶説 (episodic memory) を援用することで説明できる。Tulvingはエピソード記憶説を出来事を中心となるターゲット情報とその背景に存在する文脈 (context) から成り立っているとす。体験や思い出 (エピソード) は時間や環境、空間的な記憶、そして心情と共に記憶されるため単なる事実より記憶され、思い出しやすいといわれる。

体験談というエピソードに加え、聞くという行動、その時の状況や揺さぶられた感情を伴う「体験者の講話」が記憶に残りやすいことは、容易に想像される。

講話が有効であることが分かったが、日立市では体験者による講話を止めた、現在は実施していないという回答が多かった。さらにその機会は減っていくと考えられる。

第4章 戦争体験者の語りは若者に「伝わる」のか。

第2章、第3章で、日立市を例に平和教育についての検証を行い、共感型教育の有効性を確認した。しかし、高齢化だけが理由ではない、戦争体験者の講話（語り部活動）というコンテンツが若い世代に刺さらないという指摘を取り上げた。本章ではこれを考察する。

4-1 語らなくなった戦争体験

前章で話を伺った皆川氏、山下氏は、「戦争体験の語り部」として活動しているが、「学校数は年々減少している」と語った。学校へのアンケートでも「戦争体験者による講話を止めた」「現在は実施していない」という回答が多かった。

その理由を市内のある中学校の教師（匿名）は、「体験者の方の高齢化により、年々話が脱線しやすくなる」、「生徒が長時間話を聞くことが難しくなっている」、また「ご高齢の身体に負担をかけないためという配慮」等を挙げた。

言い換えれば戦争体験者の講話（語り部活動）というコンテンツが、話者の高齢化、受け手の変化により需要が減っているといえる。

また、前述の西宮氏は、戦争体験を語り部のように大人数の前で話す、ということはしたことがない。昔は息子に戦争体験をよく話していたが、孫たちに戦争体験を話すことはない。今回、戦争体験を人に話したのは約10年ぶりだという。

体験者の高齢化はもとより、核家族化が原因で戦争体験を家族から聞くことができなくなっている。体験が受け継がれる場は、語り部活動の減少、家庭内での機会減少と、どんど

んと減っている。

2014年には下記のような出来事があった。それを報じる朝日新聞記事を抜粋し紹介する。

修学旅行生5人、長崎の被爆者に暴言 横浜の中学校謝罪 2014年6月8日朝日朝刊

長崎原爆で被爆し、語り部として活動している森口貢（みつぎ）さん(77)＝長崎市＝が5月、修学旅行で同市を訪れた横浜市の公立中学3年生の男子生徒5人から「死に損ない」などと暴言を吐かれていたことが分かった。森口さんは学校に抗議し、校長が電話で謝罪した。被爆者団体は「生徒たちに学ぼうという気持ちが足りない」と嘆いている。

森口さんや学校によると、3年生119人が5月27日に長崎市を訪れ、森口さんが所属する「長崎の証言の会」の9人が班ごとに被爆遺構を案内した。

森口さんは10人ほどを爆心地から600メートルほどの山里小学校へ案内。話を始めようとした際、別行動をしていた男子生徒5人が近づき、「死に損ないのくそじじい」と大声を上げ、周りの生徒に向けて「笑え」「手をたたけ」などと言ったという。

森口さんは翌日、「多くの被爆者の方に申し訳なく、つらい時間でした」と記した手紙を校長に郵送。今月3日に学校へ電話すると、校長から「すみませんでした」と謝罪されたという。(中略)

森口さんは原爆投下後に長崎市中心部に入り、入市被爆をした。小学校教諭を退職後、1998年から被爆遺構の案内や講話をしている。現在は長崎の証言の会事務局長。森口さんは「こんな経験は初めて。被爆69年となり、戦争や原爆をひとつと感じているのだろうか。本気で向き合ってもらえなかったことが悔しく、悲しい」と話した。

長崎原爆被災者協議会の「自ら学ぼうという気持ちが足りなかったのでは。事前学習を含めた学ぶ姿勢が大切」と話す。被災協は修学旅行生らに年間600回ほど証言活動をしている。集中しない生徒はいても、邪魔されたことはないという。

別の報道（スポーツ報知）では、取材に対し、77歳の語り部の男性は「戦後69年がたち、戦争の悲惨さが分からない社会の雰囲気の中で子供たちが育っているのではないか」と話しているという。

4-2 観察調査 戦争体験を語る その現場で何が起きているのか

戦争体験者の講話（語り部活動）というコンテンツの現状を知るため、茨城県阿見町にある予科練記念館で行われた、高校生2年生対象の語り部の話を聞く会（高校名は匿名）で観察調査を行った。

予科練記念館は、戦前、東洋一といわれた霞ヶ浦海軍航空隊の基地の跡に設置された。予科練の歴史や町の戦史を保存・展示している。予科練は終戦までの15年間に約24万人が入隊し約1万9千人が特攻戦死したとされる。命の尊さや平和の大切さを伝えている。

同館の講話（語り部活動）は、予科練出身者の話者が、70人の生徒に話すというものだ。

話者はパワーポイントを用意し、写真などを交えながら戦争に関して生徒に語りかけている。見せ方や話し方など、工夫が感じられた。

話の長さは30分ほどである。決して長い時間ではない。しかし、生徒たちは途中から居眠り、退席、さらには外で遊び始める生徒までいる始末。半数以上が聞いていなかった。

どうしてこのようになってしまうのか、語り部の話が終わった後に数人の生徒にインタビューを行った。すると、次のような声が挙がってきた。

知らない人の話をされてもわからないし、難しかった。(女子)

戦争中の言葉の意味が分からず、難しく感じた(女子)

もちろん、全ての生徒がこのように話している訳ではない。「感動した」、「辛い思いが伝わってきた」という感想もある。

しかし、語り部活動という方法では戦争体験を伝えるのに限界があるということが分かる。なぜ、生徒たちには伝わらないのか。次のような意見があった。

自分に話しているわけではないから、分からなくても仕方ない。(男子)

分からなくなった時に聞き返せないから、つまらなくなってしまった。(男子)

話の内容を想像することができない。(女子)

戦時中の用語は知らない言葉も多い。しかし、大人数を相手にする講話では、質問できず分からないまま話が進む。そのためついていけなくなっているというのだ。

また、「内容を想像することができない」「イメージが湧かない」という意見も聞かれた。

誰かの体験談を聞くという行為は、その場の情景を頭の中で思い浮かべる、想像力が必要になる。

ただでさえ、70年以上前の話、状況や事情、歴史、価値観など現在と大きく異なる。生徒側が十分な知識を持ちあえてすり寄らない限り、体験談は理解できない。その準備、知識、人生経験がないと、体験者の本当の痛みはわからない。

表現を変えると、当事者と同じ意識を持つ「自分ゴト」ととらえることは、戦前・戦中と戦後の大きな断絶を挟んでいるだけに困難を伴うといえる。

高校生が言う「知らない人の話をされてもわからない」。「自分に話しているわけではない」。「話の内容を想像することができない」などの言葉は、正直な感想かもしれない。

日立市の平和教育でも同じことがいえ、艦砲射撃、焼夷弾といった聞き慣れない言葉が絡む内容に関し、学んでいても記憶にないと答えた例が多かった。

戦争体験の継承に対する当事者意識(=自分ゴト化)に関する考察

議論の前提として、平和教育の主な対象となる10代を、村上登司文(2018)の世代分類を参考に位置付ける。戦争体験の世代(終戦時5歳以上)に対し、戦後世代は①戦後第一世代(1946~1975年)父母が戦争体験者。②戦後第二世代(1976~2005)祖父母が戦争体験者。③戦後第三世代(2006~)祖父母が戦後生まれ、曾祖父母が戦争体験者である。

「自分ゴト」とは、他人事(ゴト)をもじった言い方で、「他人ゴトではない事柄」「自分に関係ある事柄」といった意味で用いられる。英語のレレバンス(relevance)を日本語訳し

たもの。何らかの物事に関わる、または参加している当事者または関係者であるという意識、「当事者意識」と説明できる。当事者との関係が近ければ、当事者の問題が自分ゴトと捉えられ、遠いほど他人ゴトと捉えられる。

平和教育の目的を「当事者の気持ちになって考えることができ、当事者に寄り添う姿勢が見られる（＝自分ゴト化）とする」ならば、戦後第三世代にとって第2次世界大戦は、祖父母すら経験のない単なる「昔の出来事」、他人ゴトといえる。

また、竹内久顕（2011）は、①現在の戦争は国同士でなく、対テロ戦である。テロが国際的に拡散する中では「戦争を2度と起こしてはいけない」というテーマは、現実の紛争解決につながらない。②軍事技術の発達で、現在と過去の戦争は全く様相が全く異なっている。以上により、過去の戦争と現代の戦争の乖離が、他人ゴト化の原因と指摘する。

以上を踏まえた上で、これまでの検証、村上登司文の説などを参考に、戦後第二世代、第三世代が戦争体験に関心を持つためのプロセスを考察すると、以下になる。

- ①戦争体験への共感的な理解を深める【知識】を培う。
- ②過去の戦争体験と出会う際の心理的距離を縮める。人、モノ、場所、時間などで【現在とつながる方法】で学ぶ。
- ③戦争体験を知識として知るだけでなく、体験者が持つ【想いも共有】する。
- ④戦争体験の継承を【自分ゴト】と捉える。
- ⑤以上を経て、単に戦争体験を知るだけではなく、その継承に対して一定程度以上の理解を示し、自分ができる活動に参加する。

知識、現在に繋がる、想いの共有、そして、戦争体験のみならずその継承までも自分ゴト化するというキーワードが抽出される。これを参考に、次章で新たな実践の提案を行う。

第5章 提案「戦争体験手記のリライティング」

阪神淡路大震災（1995）、東日本大震災（2012）を契機に、社会心理学では地震、津波などの災害体験の風化を防ぐ方法が研究されてきた。

東日本大震災で1000人以上の犠牲者を出した大槌町では、「3.11木碑設置プロジェクト」を立ち上げた。敢えて朽ちる素材で碑を作り、定期的に取り替える活動を行うことで、風化を防ぐものだ。宮城県では被災者がミュージカルを公演する取り組みを行っている。

これらは「参加型学習」と呼ばれ、「教えられる。やらされるのではなく、思わず夢中になってしまう。作業を通して実感が伴うことで有効である」（開発協会）とされる。

参加型学習法の知見を手掛かりに、筆者と村上ゼミ生は、日立市で20年以上、平和教育の

実践・研究を行ってきた市立豊浦中学校の須藤健治先生に助言いただき、戦争体験を自分ゴト化する方法を模索、研究した。以下の提案は、その結果から生まれたものだ。

5-1 「戦争体験手記のリライティング」の手順

「戦争体験手記リライティング」は、戦争体験記を自分たちの言葉に書き換え体験するグループ学習のメソッドである。中学校での取り組みを想定し提案する。ポイントは、知らない言葉をそのままにせず調べた上で、現在の言葉に置き換えること。これにより、自分ゴトとしてシミュレーションする効果が期待される。

「戦争体験手記リライティング」の手順

① 戦争体験記の選択

教材とする戦争体験記は、対象者に近い年齢、地域などを選ぶ。日立市には「日立の戦災」「14歳の戦争」「この傷は癒えない」など複数あるが、その中でも中学生（12～15歳）に近い日立市の戦争体験記が記されているものを選択する。被災の場所も、学習を行う学校に近い手記を選択することが好ましい。

② 戦争体験記を読む（個人活動）

まず戦争体験記を個人で読む、読みながら、意味が理解できない単語、現在と異なる地名に印をつける。

③ 言葉や地名の調査（グループ活動）

- ・グループの人数は5、6人。体験記をグループで読みながら、どの単語が現在の状況と異なるか、意味が理解できないのか、現在と異なる地名かについて確認する。
- ・それらの単語の意味や地名を自分たちで調べ、現在の言葉に置き換える。地名は聞き取り調査。現在の地図と戦時中の地図を比較、グーグルマップなどを利用し、現在その場所がどのようになっているかを把握する。

④ 書き換え作業とまとめ（グループ学習）

手記を書き換える。この時体験記の筆者が感じたこと、思ったことは活かす。

⑤ 全体発表

最後にそれぞれのグループ全員で書き換えた文章を声に出して読み、感想を言い合う。

5-1 検証

リライティングの効果について、2018年1月23日、筆者が担当する「メディアリテラシー論」受講の人文社会科学部1、2年生の男女55人に趣旨を説明し、協力の意思を確認して行った。体験記は、茨城県日立女子高校・昭和18年入学生の会編『一四歳の戦争そのとき日立は戦場だった!』（1990）。受講者の多くは日立市出身者ではないため、今回、地名の書き換えは行わないことにした。

検証は、まず戦争体験記を配布。個人で読む。その後、グループ（5～6人）で話し合い、スマホなどを利用して調べ、書き換えを行った。その後、書き換え内容の発表とリライティングの感想、戦争に対しての意見を発表し終了とした。

【原文】久しぶりに家族全員で朝ごはんを食べ終わると1空襲警報発令。2ラジオで3「B29

百機、東京を通過して鹿島灘及び九十九里浜より遁走中」と言う報道がありました。4突然「5爆弾だ」と叫んだ途端に「ザー」と言う音がし、6黒い爆弾が落ちてきたかと思うと、大地を揺さぶるような「ドドン」と言う響き。7炸裂の振動で、内臓が飛び出すのではないかと思いました。兄が、8海岸工場か9電線工場か、10国旗山へ登ればわかるだろうと言って11走り出しましたので、私も一緒に走りました。恐怖で鼓動が高まり、苦しくて、長い時間に思えました。 『14歳の戦争』から

【書き換え（例）ゼミ生が作成したもの】 久しぶりに家族全員で朝ごはんを食べ終わると全国瞬時警戒システムJアラート発令。テレビやインターネットのニュース速報で「ミサイル発射情報、ミサイル発射情報。当地域に、着弾する可能性があります。屋内に避難し、テレビ、ラジオをつけてください。」と鳴り響きました。弾道速度がマッハを超えるスピード。突然「ミサイルだ」と叫んだ途端に「ザー」と言う音がし、大きいミサイルが落ちてきたかと思うと、大地を揺さぶるような「ドドン」と言う響き。爆発の振動で、内臓が飛び出すのではないかと思いました。兄が、幸町3丁目の日立製作所海岸工場か助川町3丁目の電線工場か、高鈴台中央公園へ登ればわかるだろうと言っていました。ミサイルは発射後、7分～10分で到着。Jアラートは発射4分後に鳴るので、残り3分で近くのシェルターへと逃げ込まなければなりません。恐怖で鼓動が高まり、苦しくて、長い時間に思えました。

	原文	リライト後	解説
1	空襲警報	全国瞬時警報システムJアラート	空襲警報のない現代、攻撃がされたとしたら、Jアラートが発令される
2	ラジオ	テレビやインターネットのニュース速報	現代は、ラジオよりもテレビの報道やインターネット上での拡散が主な情報収集手段
3	「B29百機、東京を通過して鹿島灘及び九十九里浜より遁走中」と言う報道があり	「ミサイル発射情報、ミサイル発射情報。当地域に、着弾する可能性があります。屋内に避難し、テレビ、ラジオをつけてください。」と鳴り響き	1トン爆弾が搭載されていたであろうB29は、現代はもう使用されていない攻撃機。今、起こり得る攻撃は、ミサイルだと考えられる
4	(挿入)	弾道速度がマッハを超えるスピード。	ミサイルについて調べて得た情報を挿入
5	爆弾	ミサイル	今起こり得る攻撃はミサイル
6	黒い爆弾	大きいミサイル	今起こり得る攻撃はミサイル
7	炸裂	爆発	理解しやすい言葉に書き換え
8	海岸工場	幸町3丁目の日立製作所日立工場	昔と今の地図を照らし合わせ、現在の場所を特定
9	電線工場	助川町3丁目の日立金属電線工場	昔と今の地図を照らし合わせ、現在の場所を特定

10	国旗山	高鈴台中央公園	昔と今の地図を照らし合わせ、現在の場所を特定
11	走り出しましたので、私も一緒に走りました	ミサイルは発射後、7分～10分で到着。Jアラートは発射4分後に鳴るので、残り3分で近くのシェルターへと逃げ込まなければなりません	ミサイルが発射された際の状況や避難法について調べたことを挿入

検証結果

——質問① 今まで第二次世界大戦や太平洋戦争についての話を聞いたことがありますか。

この質問に対し、「長崎の原爆資料館」や「知覧の特攻平和記念館に旅行で行ったことがあり、写真などを見たことがある」、「曾祖父がシベリアで抑留され、そこで亡くなって、曾祖母がまだ幼かった祖父たちを女手一つで育てたということを知ったことがある」など詳しく話を聞いたことがある人（18人）もいれば、高校までの学校の授業程度でしか聞いたことがなかった、教科書で習った程度の話しか分からず、具体的なことはよく知らなかったという意見（6人）もあり、個人差があった。

前述授業の受講者は、県外6割、県内4割。出身地が広く多岐に及ぶ。この回答からも、平和教育の状況について自治体により濃淡があることがわかった。

——質問② 今回の作業を通して、70年以上前に私たちと同じ世代の若者の多くが日本国内で亡くなったことについてどう感じましたか。

下記のように、「自分自身にも起きうるのだ」。「日立という身近な都市で多くの若者が亡くなったという事実」「無関係ではない」「他人事ではない」など（11人）、リライトに際して同年齢の戦争体験記を選ぶこと、身近な土地を選ぶことに、一定の効果があつた。

また現代の状況に当てはめることで「恐怖を感じた」（5人）、「現代で、自分がそのうちの一人になるかもしれないと考えて怖くなった」（2年女子）という意見もあつた。書き換えという行為により、自分たちが知っている現代の戦争のリアリティーが呼び起こされるということができる。

- 自分が今の年で死ぬということは想像できなかった。しかし、戦争の犠牲で自分と同じくらいの年で亡くなった人がいるのは事実であり、またそれが自分自身にも起きうるのだと考えさせられた。（1年男子）
- 日立という身近な都市で多くの若者が亡くなったという事実はショッキングであつたし、戦争を忘れてしまい過去の出来事にはいけないと思った。（2年男子）
- 昔のことだと考えると遠いものを感じるが、同世代と考えると人ごとだと思つてはいけないと感じた。（1年女子）

——質問③ 今回の作業を通して、戦争についてどう感じましたか。

この問いに対しては、以下の回答があった。危機感を持ったという意見が多く（44人）あった。「正直、まだ現実味がない」という意見もあったが、その後に「だが、二度と繰り返してはいけないし、語り継がれていくべきものだと感じた」と綴られており、戦争体験の語り継ぐ必要性を実感したといえる。

- 言葉を現代に置き換えることで戦争とは決して自分に関係のないものではなく、とて身近にあるものだと気づかされた。（2年女子）
- 今、私たちも北朝鮮のミサイルにおびえているように、いつ起こってもおかしくないことを再確認させられた。平和ボケをしている日本は危ないと思った。（1年男子）

——質問④ 今回行った作業についてどのように感じましたか。

概ね肯定的な評価（50人）であった。しかし、「知らないことが多いなと感じた。若者で、第二次世界大戦について正確に知っている人は少ないと思った」（2年男子）、「現代のことに置き換えるのが難しかった」（1年女子）など、そもそも言葉を置き換えるほど、現代の戦争に対する知識、軍事知識がないという指摘（4人）があった。

今回は、2016年以来、北朝鮮による3回の核実験、40発の弾道ミサイル発射が強行され（防衛省）、これに対する米朝戦争の危機が迫っていたタイミング。比較的、軍事知識が一般化していた時期といえる。それでもこのような意見があり、今日の状況を踏まえた上の基本的な平和教育の必要性を指摘するものといえる。

- 体験したことがないものもあるが、あまり近いものには最初思えなかったが文字にして見ることで感じることができた。（2年女子）

その他、グループ活動に関しては「他の人の意見について知ることができる良い機会となった」（1年男子）、「他の人の意見を聞いて考えを深めることができた」（1年女子）などの声があり、概ね肯定的であった。

第6章 まとめ

第2次世界大戦の戦争被害を受けて、戦後日本では教育現場と自治体の活動による平和教育の実践の中で戦争体験が継承されてきた。戦争体験を継承し、戦争を体験していない世代も含む集団的記憶として人々の平和意識を高めることが、平和教育の重要な役割だ。

記憶の継承が難しくなった最大の理由は、戦後72年という時間経過による。戦争を直に体験した世代が高齢化し減少し、戦争の直接的・対面的な継承が困難となったことにある。

しかし、体験世代の減少は止めようのない事実であり、それを理由にしてしまつては、継承はできない。他の要因を突き止め排除、修正することでその後に備えることができるのではないか。これが、本稿の問題意識であった。

戦争体験者の減少という現実はあるとしても、現代のアーカイブ技術をもってすればデータとして何かを残すこと、過去の体験・記憶を現在、未来に伝えることのハードルはないともいえる。しかし、そのデータがアクセスされなければ、継承にならない。「戦後第三世代（2006～）」は祖父母さえも戦争を知らない。その世代がいかに過去に触れ続けていくか、それはどのような形をとるのかの考察が、本稿の目標でもあった。

本稿で、平和教育を死者数等のデータを伝える「知識型」教育と、戦争体験を迫体験させる語り部活動のような「共感型」教育に分類した。「知識型」教育は長く記憶に残りにくいという欠点が指摘される。一方、知識がなければ「共感型」教育を理解することが出来ないということも指摘できる。そのため、どちらも並行して行うことが必要である。

祖父母に至るまで戦争体験がない、戦前と戦後の大きな断絶、竹内が指摘する過去の戦争と現代の戦争の乖離等から、戦後第三世代にとって、第二次世界大戦における郷土の戦争体験は、自分と全く関係のない単なる他人ゴトの「歴史」でしかない。

それに対し、戦争の知識、現在に繋がる、想いの共有、そして、戦争体験のみならずその継承までも自分ゴト化するためのプロセスを提示した。

その上で、参加型学習「戦争体験手記のリライティング」というメソッドを開発、一定の効果を上げることを確かめた。自分の場合はと想像し、グループで語り合うことで、当事者意識を持つきっかけになるのである。

これらの結果に対し、前述、須藤先生は次のように述べている。「戦争を自分ゴト化できなくなってしまっているという問題を解決するため、新たな戦争の継承方法として、戦争体験手記リライティングは有効である」。今後、筆者及び村上ゼミと協力し、検証、実践を行う予定である。

また本研究の結果については、2018年2月9日（金）に日立市役所市民活動課課長、宮田貴史氏、係長、鈴木亨氏、主事、根本寛朗氏に報告を行った。それに対しガイドブック、DVDの利用など、市では調べ切れなかった状況の指摘に感謝を頂き、「リライティングメソッドを社会科担当の先生に聞かせたい」というコメントがあった。以上を最後に付け加え、本稿を終える。

参考文献

- ・阿見町史編さん委員会 (1983) 『阿見町史』 阿見町
- ・茨城県日立高女昭和18年入学生の会 (1990) 『十四歳の戦争』 BOC出版部
- ・池野範男 (2008) 『学校における平和教育の課題と展望—原爆教材を事例として—』 学術セミナー
- ・NHKスペシャル 戦争の真実シリーズ1 (2018) 『本土空襲全記録』 KADOKAWA
- ・世界の傑作機編 (1996) 『世界の傑作機No.52 ボーイングB29 スーパーフォートレス』 文林堂
- ・竹内久顕編著 (2011) 『平和教育を問い直す』 法律文化社
- ・土浦市史編さん委員会 (1975) 『土浦市史』 土浦市役所
- ・日立市史編さん会 (1959) 『日立市史』 日立市役所
- ・日立市史編さん委員会 (1996) 『新修日立市下巻』 日立市役所
- ・日立市の戦災と生活を記録する市民の会 (1984) 『日立戦災史』 日立市役所
- ・日立市郷土博物館 (2011) 『写真でたどる日立百年のあゆみ』 日立市郷土博物館
- ・日立市郷土博物館 (2003) 『日立の空襲』 日立市郷土博物館
- ・日立市役所 (2017) 『日立の戦災』 日立市役所
- ・日立市役所 (1960) 『日立市の戦災と生活』 日立市役所
- ・日立市役所 (1947) 『日立市と日立市南部の地域』 日立市役所
- ・福岡良明 (2009) 『戦争体験の戦後史：世代・教養・イデオロギー』 中公新書
- ・Griffin, Susan.松野良一 (2010) 『戦争を生きた先輩たち～平和を生きる大学生が取材し、学んだこと～I』 中央大学出版部
- ・正村公宏 (1979) 『戦後史』 筑摩書房
- ・矢守克也 (2011) 『生活防災のすすめ 東日本大震災と日本社会』 ナカニシヤ出版
- ・村上 登司文 (2016) 『戦争体験継承に対する当事者意識を育てる教育の考察』 京都教育大学教育実践研究紀要 第18号
- ・Tulving, E. (1983). Elements of episodic memory. New York: Oxford University Press.
- ・タルヴィング, E.著 太田信夫 (訳) (1985) 『タルヴィングの記憶理論』 教育出版

- ・NHK NEWS WEB 終戦の日 14%が「知らない」 18歳と19歳世論調査
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/wakamonotoheiwa/0809_news.html>2017.10.25アクセス
- ・総務省「人口推計年報」(2017年7月8日)
<<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.htm>>2017. 10.25アクセス
- ・国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口(中位推計)(2017年7月8日)
<<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Mainmenu.asp>>2017.10.25アクセス
- ・日立市教育委員会 | 日立市立中学校一覧
<www.city.hitachi.lg.jp/kyouiku/school/003/p002213.html>2017.11.15アクセス
- ・日立市教育委員会 | 日立市内小学校一覧
<www.city.hitachi.lg.jp/kyouiku/school/002/p002211.html>2017.11.15アクセス
- ・日立市の高校一覧(茨城県) - 高校受験ナビ
<https://www.zyuken.net/ad_mun/108202.html>2017.11.15アクセス
- ・開発教育協会<<http://www.dear.or.jp/activity/menu06.html>>2017.12.31アクセス

- ・朝日新聞 2015年12月10日 朝刊
- ・朝日新聞 2016年8月16日 朝刊
- ・京都新聞 2017年08月09日 11時59分
<<http://kyoto-np.co.jp/local/article/20170809000084>>2018.1.4アクセス
- ・毎日新聞 2016年8月15日(最終更新18時32分)

- <<https://mainichi.jp/articles/20160815/k00/00e/040/307000c>>2018.1.4アクセス
- ・データエッセイ 戦争経験世代の量の変化
<http://tmaita77.blogspot.jp/2013/08/blog-post_15.html>2018.1.4アクセス
- ・総務省『人口推計年報』
<<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/index.htm>>2018.1.4アクセス
- ・国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口（中位推計）
<<http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Mainmenu.asp>>2018.1.4アクセス
- ・島 晃一・片田敏孝・木村さやか（2010）
『被災経験の風化と災害文化の定着過程に関する一考察』土木計画学研究・講演集
- ・人口・面積・人口密度
<<http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-4032.html>>2018.2.4アクセス